

## [教育実践研究報告]

## 成熟期看護学実習の外来実習と透析室実習で捉えた「看護」の比較

田 中 克 子      梅 津 美 香      小 田 和 美      北 村 直 子  
 兼 松 恵 子      奥 村 美奈子      古 川 直 美      原      敦 子  
 林      幸 子      小 野 幸 子      坂 田 直 美      齋 藤 和 子

The Comparison with "Nursing" that Student Have Gained in Outpatient Unit  
 and in Dialysis Unit for Adult

Katsuko Tanaka, Umezu Mika, Kazumi Oda, Naoko Kitamura,  
 Keiko Kanematsu, Minako Okumura, Naomi Frukawa, Atsuko Hara,  
 Sachiko Hara, Sachiko Ono, Naomi Sakata, and Kazuko Saito

## ．はじめに

3年次に行われている看護学領域別実習における成熟期看護学は、実習1, 2, 3で構成されており、実習2では、労働の場、一般病院と高齢者ケア施設において実習を行っている。一般病院においては、「社会生活を営みながら外来診療を利用している人とその家族への看護実習」を1日、表1に示されているように関連外来または透析室で実習を行っている。昨年の紀要では外来実習において学生が捉えた「看護」について、ほぼ具体的目標は達成できていると報告<sup>1)</sup>した。今回は、その報告の継続として、同様に行っている透析室実習で学生が捉えた「看護」について分析し、成熟期看護学実習の「社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習」の方向性の示唆を得るために、外来実習で捉えた「看護」と比較することとした。なお、昨年の報告<sup>2)</sup>と同様に、学生の記録から目的・意図がある看護行為を「看護」として抽出した。

表1 一般病院における実習部署の背景

施設	A	B	C	D	E
施設規模	555床	303床	301床	675床	300床
実習部署	外科系	外科系	外科系	内科系	内科系
社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習	関連外来	透析室	透析室	関連外来	関連外来

．成熟期看護学実習における「社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習」の概要

## 1. 基本的考え方

成熟期看護学実習では実習目的を「さまざまな健康状態で生活を営んでいる成熟期の人々への看護実践を通じて、成熟期看護のあり方について理解を深める」としており、具体的目標として1. 成熟期にある人とその家族の健康生活を理解し、看護の役割と特性を学ぶ、2. 健康課題の異なる成熟期にある人とその家族を理解し、看護の役割と特性を学ぶ、の2つの具体的目標を軸に、対象の理解の視点と援助の視点を示している。そのもとで「社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習」である外来実習と透析室実習を行っている。このことから、外来実習と透析室実習では、対象すべてに共通する1の具体的目標の＜援助の視点＞である(1)その人と家族の意思・意向を尊重した援助、(2)その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助、(3)その人と家族の安全性と安楽性を確保した看護、(4)保健・医療・福祉との有機的な連携、を分析の視点とした。

## 2. 外来実習と透析室実習の方法

外来実習では、実習病棟の関連外来で一人以上の患者を受け持ち、来院時の待合から受診、検査、会計を終了し、帰院時までの過程を付き添い体験する実習を行った。

担当する患者は、病棟での受け持ち患者とできるだけ類似した患者を持つようにしたが、状況によってはできない場合もあった。患者の選択については、外来の実習担当者が決定し、患者の同意を得られた場合とした。

実習内容については外来の状況によって、特殊外来や検査の見学が組み入れられる場合もあった。

透析室では、患者を一人受け持ち、透析前の体重測定から、穿刺、透析、透析終了後の体重測定までの過程を付き添い体験する実習を行った。患者の選択については、外来と同様に実習担当者が決定し、患者の同意を得られた場合とした。

実習内容については、透析室の状況によって透析室のシステムなどについての講義を事前に実習指導者やスタッフから約1時間受ける場合もあった。

外来、透析室実習時間は原則として8時30分から16時まで、実習後には、実習指導者とともに約30分から1時間のカンファレンスを行った。実習終了後、学生は所定の実習記録用紙（A4版1枚）を担当教員に提出し、実習指導者には、担当教員からその記録用紙をコピーして渡した。

成熟期看護学実習においては実習3で、理論と実践の統合を行っている。

## ・ 研究目的

成熟期看護学実習における「社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習」である外来実習および透析室実習で学生が捉えた「看護」を具体的な目標である＜援助の視点＞(1)～(4)から分析し、比較することによって、今後の実習の方向性の示唆を得ることである。

## ・ 方法

### 1. 分析対象

平成14年度成熟期看護学領域別実習において、外来実習を行った38名中承諾の得られた37名と透析室実習を行った38名中承諾の得られた36名のそれぞれの「実習記録用紙」の記述内容である。

### 2. 分析方法

外来および透析室実習記録用紙の項目「外来診療を利用しているまたは透析療法を受けている成熟期の人々と

その家族に対してどのような看護ケアがおこなわれていましたか」、「この実習で学んだこと、感じたことを書いてください」に対する記述内容から目的・意図の記述のある看護行為を抽出した。抽出にあたっては学生の記述の意味・語彙を変えないようにし、目的・意図ごとに1項目の看護とした。意味のわかりにくいものは前後の文章から補足し、( ) 内に示した。

抽出した看護を具体的な目標の＜援助の視点＞(1)～(4)に分類し、記述された目的・意図の性質によって分類、命名した。＜援助の視点＞(1)～(4)に分類できないものは分析対象から省いた。分析は、意味内容の類似性によって成熟期看護学講座4名の教員で合意が得られるまで繰り返し検討を重ねた。

## 3. 倫理的配慮

実習記録提出後、口頭で本研究の目的を説明するとともに、研究の承諾の有無が成績に影響しないこと、プライバシーの保護への配慮、について説明し、文書で研究への同意を依頼した。

## ・ 結果

### 1. 目的・意図の記述のある「看護」の学生の記述

外来実習で、記述のあった学生は37名中32名(94.6%)で記述数は115、透析室実習で記述のあった学生は36名中34名(94.5%)で記述数は123であった。

### 2. 具体的目標1の＜援助の視点＞(1)～(4)から見た学生が記述した、外来実習と透析室実習での看護

なお、【 】内は命名された項目を、「 」内は看護を示す。

また、紙面の都合上、看護は代表的な記述の例を示す。

1) ＜援助の視点＞(1)その人と家族の意思・意向を尊重した援助

外来実習で分類された「看護」は【患者・家族の思いや希望が尊重される】の1項目で、透析室実習で分類された「看護」は【患者・家族の思いや希望が尊重される】、【自分の意志で治療に取り組める】の2項目であった。双方に共通している項目は【患者・家族の思いや希望が尊重される】であった。

2) ＜援助の視点＞(2)その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助

外来実習で分類された「看護」は6項目であった。う

ち自己管理に関する項目が【患者が自己管理できる】、  
【患者の自己管理のきっかけをつくる】の2項目であっ  
た。広く生活の視点からみた【患者・家族の生活を尊重  
する】、【患者・家族がよりよく生活できる】が2項目あっ  
た。

透析室実習で分類された「看護」は7項目で、うち、  
自己管理に関する項目が【患者が自己管理できる】、【患  
者の自己管理能力が高まる】、【患者の自己管理を評価す  
る】、【家族が患者の自己管理に参加・協力する】の4項  
目であり、外来実習よりも自己管理に関する項目が多かつ

表2 具体的目標1の＜援助の視点＞からみた学生が記述した外来での「看護」

＜援助の視点＞	項目	学生が記述した「看護」の例
(1) その人と家族の意向・意志を尊重した援助	患者・家族の思いや希望を尊重する	患者が思いや困っていることを話（せるように）声をかける 治療についての患者のニーズを（満たすために）対応する
(2) その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助	患者が自己管理できる	（患者が）家庭にて安心して自己管理が出来るように支えていく （患者が自宅で）よりよい方向へ進むように一緒に考える
	患者が主体的にとりくめる	患者が主体的になるように医師の説明で理解しにくかったところを分かる（ように）説明する
	患者が自己決定できる	患者の自己決定への支援（となるように）患者がイメージできるようにプリントを見せて説明する
	患者の自己管理のきっかけをつくる	（患者を）次回につなげるように（自己管理への）意識付けを（するために）アドバイスを与える （患者の）セルフケア行動の動機付けをする（ために）イメージしてもらう
	患者・家族の生活を尊重する	（患者の）生活に基づいた（自分の生活を営めるように）予約時間を調整する 家庭の中の患者の役割を考慮し（家族内の役割が果たせるように）予約時間を調整する
	患者・家族がよりよく生活できる	（患者・家族が）在宅で暮らせるように家族を含めて看護計画を立てる 患者が在宅での対応に困らないように説明する
	患者が安全に生活できる	老人の方（患者）には理解されない場合もあるので（患者が確実に服薬できるように）家族の付き添いを求める・家族に連絡する （患者の）家庭生活がより健康に、安全に送られるように知識・情報提供し指導する
(3) その人と家族の安全性と安楽性を確保した援助	患者が確実に診察、検査、処方が受けられる	病院内で事故が起こらないように安全安楽に気をつける 一人一人に付き添って受診を見ていくことはできないので（患者がレントゲン室に行けるように）説明する
	患者が適切に診察、検査、処方が受けられる	待たせてもよい患者と緊急性のある患者を区別する（ために）情報収集・状況説明する 患者が安全・安楽に診察を受けることが出来るように待合室の様子をうかがう
	患者・家族の病状や受診に伴う不安や悩みなどが軽減される	患者や家族の不安や悩みなど（を軽減するために）対応する 患者の不安や心配な事、分からないこと（を軽減するために）説明・情報提供・配慮する
	患者・家族の負担ができるだけ少なく診察、検査が受けられる	患者の待ち時間などの負担を軽減（するために）診療をスムーズにする 患者がスムーズに受診できるように案内やカルテ整理をする
	患者・家族の気持ちが和らぐ	患者の気分を害してしまう（ことのないように）注意して話す （患者に）不快な思いをさせないように笑顔・声をかける
	在宅での患者の病状や受診に伴う不安や悩みなどが軽減される	（在宅で患者が）安心して生活できる（ように）患者が支えられている実感を得られるようにする 家庭に帰られる患者が少しでも安心して次の診察まで過ごせるように（患者が家で安心してすごせるように）掲示物・パンフレットを利用する
(4) 保健・医療・福祉との有機的な連携		

表3 具体的目標1の＜援助の視点＞からみた学生が記述した透析室での「看護」

＜援助の視点＞	項目	学生が記述した「看護」の例
(1) その人と家族の意向・意志を尊重した援助	患者・家族の思いや希望が尊重される	本人の思いを尊重しつつ指導するために、普段の生活の様子を聞く 本人や家族の考え方を尊重するために、説明を押しつけない
	自分の意志で治療に取り組める	患者が主体的に行えるように、患者に透析の調節について確認を取る 意欲の向上を図るために、透析や自己管理の動機づけを行う
(2) その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助	患者が自己管理できる	自己管理のできない部分を補うために、アドバイスをしたり、(食事内容の計算を手伝うなど) 手助けをする 病気についてわからないことの解消のために、情報を提供する
	患者が主体的に取り組める	自分から進んで自己管理に取り組めるように、十分に説明して納得してもらうようにする 患者が主体的に行えるように、患者に透析の調節について確認を取る
	患者の自己管理の能力が高まる	よりよいセルフケアができるように、随時セルフケアのあり方をアセスメントして関わる セルフケア能力を高めるために、自己管理ノートをつけるように促す
	患者の自己管理を評価する	問題がないか確認して指導するために、普段の生活の様子を聞く 体重コントロールができていないかを確かめるために、透析前に体重測定を行う
	患者の就労の問題が解決される	患者の就労の問題に対応するために、夜間透析が行える病院を紹介する
	患者が家族の自己管理に参加・協力する	患者が自己管理ができていない時に(家族に協力してもらえるように)、家族へ手紙を書く 家族も巻き込んだ治療をするために、患者がコントロールできない様子の時に家族と話したり、説明の機会を作る
	治療時間が有意義に過ごせる	透析の時間が患者にとって有意義となるように、患者の話を傾聴したり、日常生活について話しかける
(3) その人と家族の安全性と安楽性を確保した援助	患者が安全に生活できる	異常や今後のケアが必要なところをアセスメントするために、今回の透析までの患者の生活、健康状態をアセスメントする 高齢な患者が暑い季節に食事を過剰に制限して[危険がないように]、体力を付けるように説明する
	患者が安全に治療が受けられる	事故防止のために、出血事故・透析液の濃度の間違いに注意する・常に一人一人の観察を怠らない 状態の変化を見逃さないように、バイタルサインのチェックや一般状態の把握をする
	患者が安全かつ安楽に治療が受けられる	安全も大切だが患者のためにも毎回のテープの使用で皮膚が荒れてしまうのを防ぐために、皮膚に優しいテープを使用して針の固定をする
	患者が安心して治療が受けられる	患者が安心して透析を行えるために、透析液の濃度の管理、透析装置からの液だれ防止、機械による事故防止の管理をする 患者に安心感を与えるために、明るく接する
	患者が気分良く治療が受けられる	透析中退屈せず、気分がほぐれるように、世間話をしながら情報収集する 患者の気分を紛らせて精神的緩和のため、日常会話をする
	患者が負担が少なく治療が受けられる	患者が片手しか使えないので食べやすいように、配膳やお茶の用意をする 患者の時間の拘束をできる限り少なくするために、透析開始が遅れないように準備して患者が早く帰れるようにつとめる
	患者・家族が病気や治療を受け入れる	透析を受け入れられるように、励ましながらい時間をかけて支援する 本人と家族に透析療法について受容してもらうために、病院に来てもらい説明する
	患者の死に対する不安がケアされる	死に対する不安を持つ人の支えとなるために、心のケアをする
	患者・家族が不安や悩みなどが軽減される	不安の軽減のために、患者の話を傾聴したり、日常生活について話しかける 家族の不安に対応するために家族と話しをする
(4) 保健・医療・福祉との有機的な連携	患者の状況に応じて病院を紹介する	患者の就労の問題に対応するために、夜間透析が行える病院を紹介する
	栄養士など他職種と連携する	定期的に指導してもらうために、栄養士など他職種と連携する



た。自立性に関連するものとして【患者の就労の問題が解決される】が1項目あった。双方に共通する「看護」は、【患者が自己管理できる】、【患者が主体的に取り組める】の2項目であった。

### 3) <援助の視点> (3) その人と家族の安全性と安楽性を確保した援助

外来実習で分類された「看護」は最も多く7項目あった。安全性に関連するものとして【患者が安全に生活できる】、【患者が確実に診察、検査、処方が受けられる】、【患者が適切に診察、検査、処方が受けられる】の3項目あった。安楽性に関連するものとして【患者・家族の病状や受診に伴う不安や悩みなどが軽減される】、【患者・家族の負担ができるだけ少なく診察、検査が受けられる】、【患者・家族の気持ちが和らぐ】、【在宅での患者の病状や受診に伴う不安や悩みなどが軽減される】の4項目あった。

透析室実習でも分類された「看護」は最も多く9項目であった。安全性に関連するものとして【患者が安全に生活できる】、【患者が安全に治療が受けられる】の2項目あった。安楽性に関連するものとして【患者が安心して治療が受けられる】、【患者が気分良く治療が受けられる】、【患者が負担が少なく治療が受けられる】、【患者・家族が病気や治療を受け入れる】、【患者が死に対する不安がケアされる】、【患者・家族が不安や悩みなどが軽減される】の6項目であり、外来実習よりも安楽性に関する項目が多かった。安全性・安楽性に関連するものとして【患者が安全に安楽に治療が受けられる】が1項目あった。双方に共通する項目は【患者が安全に生活できる】であった。

### 4) <援助の視点> (3) 保健・医療・福祉との有機的な連携

外来実習では見られなかった。透析室実習で分類された「看護」は【患者の状況に応じて病院を紹介する】、【栄養士など他職種と連携する】の2項目であった。

## 考察

### 1. 外来実習と透析室実習での援助の視点の達成状況

具体的目標1の<援助の視点> (1)～(4)の4つの援助の視点からみると、外来実習においては(4)の保健・医療・福祉との有機的な連携、以外の3項目については学

ぶ機会が得られる状況であること、透析室実習においては4項目すべてが学ぶ機会が得られる状況であることが明らかとなった。また、ほとんどの記述が患者主体に援助の視点を捉えていたことから、本実習の方法は、一日という限られた日程と環境下で行われているが、実習指導者の多大な努力もあって、基本的には成果をあげているといえる。

次に項目の多い順について述べる。

<援助の視点> (3) その人と家族の安全性・安楽性を確保した援助、について透析室実習では【患者が安全に治療が受けられる】、【患者が安全かつ安楽に治療が受け入れられる】、【患者が安心して治療が受けられる】、【患者が気分よく治療が受けられる】など、治療そのものに関する記述が多いのは、透析室は治療が透析療法に限定されており、その特徴を学生が捉えているためであろう。

さらに、【患者が安全に生活できる】、【患者・家族が病気や治療を受け入れる】、【患者の死に対する不安をケアする】、【自己管理に伴う患者・家族の不安や悩みなどが軽減される】から、学生は、透析治療そのものから発展させて病気をもつ人や家族という視点からも、安全性と安楽性を捉えている。このことは一人の患者の透析開始から透析治療終了時までの過程に付き添うことによって得られた成果だと思われる。

外来実習では、<援助の視点> (3)について、学生は患者に付き添うことを通して、システム上の問題に対応した行為をその目的・意図と捉えることによって看護として捉えることができている<sup>3)</sup>と述べた。

今回、外来実習と透析室実習で学生が捉えた「看護」を比較すると、透析という治療が限定された場と外来という多種多様な場との違いが現れている。しかし、患者に付き添うことを通して、学生が行為や治療の目的・意図を捉えることによって、より広い視野で安全性と安楽性についての「看護」を捉えていると考えられる。

<援助の視点> (2) その人と家族の自立性と自律性を尊重した援助、については、外来実習と透析室実習の双方に【患者が自己管理できる】、【患者が主体的に取り組める】が見られることから、双方の実習で自己管理についての「看護」が捉えられていると思われる。しかし、他の項目を見ると、外来実習では【患者が自己管理のきっかけをつくる】、透析室実習では、【患者の自己管理能

力が高まる】、【家族が患者の自己管理に参加・協力する】、【患者の自己管理を評価する】から、自己管理については、外来実習では治療の導入であるきっかけ作りの点から捉えており、透析室実習では、治療を継続するなかで能力を促進し、評価するという点から自己管理を捉えている。このことから、自己管理の点から見ると、外来実習と透析室実習では「看護」を捉えた視点に違いがあるといえる。また、外来実習では患者・家族の生活の視点から「看護」が捉えられており、透析室実習においても就労の視点から「看護」が捉えられていることから、双方の実習において、広義、狭義の違いはあるにせよ生活の視点から「看護」を捉えていると思われる。以上述べた視点の違いは、就労も生活の一部ではあるが、特に透析室では外来と比較すると、時間的拘束が長く頻度も高い治療法であるために影響を受ける就労の問題が記述されているのであろう。

援助の視点(1)その人と家族の意思・意向を尊重した援助、については、透析室実習では【患者・家族の思いや希望が尊重される】、【自分の意志で治療に取り組める】の2項目、外来実習では【患者・家族の思いや希望が尊重される】の1項目だけであった。外来実習では患者に付き添うことが学びの中心であるため学ぶ機会が少ないことがその理由として考えられる<sup>4)</sup>と述べたが、限局された場所で、ある一定の時間患者と看護師が比較的継続的にかかわるので学ぶ機会が多いと思われる透析室実習においても捉えた項目が少ないことから、カンファレンスで強化するなどの検討も今後必要であらう。

援助の視点(4)保健・医療・福祉との有機的な連携、については、透析室実習では【患者の状況に合わせて病院を紹介する】、【栄養士など他職種と連携する】から、職業や食事等、患者個人の生活の視点に立った連携についての「看護」を学ぶ機会を得ている。このことは、透析という治療の特徴として栄養指導のように自己管理の援助など、連携の必要性が高い場であるためと思われる。

一方、外来実習では、項目がなかったことについて、石井<sup>5)</sup>らは、「外来の看護の実際」として診察に必要な情報収集や検査の説明、慢性疾患児や親の心理的負担の働きかけ、「看護の役割」として、安全・安楽に診察が受けられる環境作り、医師へ思いが伝えられるための仲介、健康に生活を送る上での保健指導と述べていることから、

外来では、捉えにくい看護であろうと思われる。しかし、現実には連携は行われているので、カンファレンスで事例を用いて補足・強化する方法も必要であらう。

## 2. 成熟期看護学実習における「社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習」の課題

課題の第一は、＜援助の視点＞(4)が透析室実習では捉えられていたが、外来実習で捉えられていなかったことである。外来実習での捉えにくさについては付き添う患者選択の問題もある<sup>6)</sup>と述べたが、その意見については今回も支持せざるを得ない。

第二は、＜援助の視点＞(1)の項目が少なかったことである。患者に付き添う実習方法だったこともあり、外来実習や透析室実習では、1日の実習では、看護師が患者や家族とかわる場面を見る機会が案外少なかったのではないだろうか。実習3での理論と実践の統合の中で、補足・強化する方法も必要であらう。

## 3. 今後の方向性

外来実習と透析室実習を具体的目標1の＜援助の視点＞4点からみた看護の捉え方について比較すると、場の違いから視点のおかれ方に違いは見られるが、共通する項目が多いこと、そして具体的目標1の＜援助の視点＞4点の達成状況については、不足な点については現実的に改善できる可能性が示唆されたので、概ね達成できることが明らかとなった。このことから「社会生活を営みながら外来治療を受けている人とその家族への看護実習」として現在行っている外来実習と透析室実習は、適当であるといえよう。したがって、今後実習する上で、実習病棟の関連外来にこだわらず、場所の選択の幅を広げることができるという示唆が得られたという意味では、非常に意義がある。

また、学生が患者に付き添うことを通して、実習することは、ほとんどの記述が患者主体に援助の視点を捉えていたことから効果的な方法であったと考えられる。

外来実習や透析室実習の特徴として、病棟では捉えることができない看護の役割・機能を捉え患者を、日常生活をしている人々であることに気づかせる<sup>7-9)</sup>と述べていることから、われわれが行っている外来実習と透析室実習の2つの実習を経験する形態は有意義であると思われる。今後は、より充実するように実習内容について検討していきたい。

## まとめ

1. 成熟期看護学実習の具体的目標1の＜援助の視点＞の達成状況については透析室実習では4つ全てが、外来実習では＜援助の視点＞(4)を除き学ぶ機会が得られる状況にあることが明らかとなった。
2. 外来実習と透析室実習を具体的目標1の＜援助の視点＞4点からみた看護の捉え方を比較すると、場の違いから視点のおかれ方に違いは見られるが、共通する項目が多かった。
3. 2の結果から、今後実習する上で、関連病棟外来の外にも実習場所が選択できるという示唆が得られた。
4. 外来実習と透析室実習において具体的目標1の＜援助の視点＞(1)の学ぶ機会が少なかった。
5. 効果的な実習方法について、今後、患者選択やカンファレンス、実践と理論の統合などの方法について検討していくことが有効であることが示唆された。

傾向について第2報 - 透析室実習における学生の実習自己評価の分析から - , 埼玉県立短大部紀要, 3; 61-70, 2001.

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり実習記録を使用することについて許可していただいた学生の皆様に感謝いたします。  
さらに、学生の学びを最大限に引き出そうと努力していただいております実習担当者の皆様に深謝いたします。

## 引用文献

- 1) 小田和美, 田中克子, 北村直子, 梅津美香ほか: 成熟期看護学実習の外来実習において学生が捕らえた「看護」 - 目標達成度からみた実習方法の課題と方向性 -, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1); 95-101, 2003.
- 2) 前掲 1) 95.
- 3) 前掲 1) 99.
- 4) 前掲 1) 100.
- 5) 石井由美, 及川郁子: 小児看護学における外来実習について - 外来実習の変遷と本学学生の実習の学びから -, 聖路加看護大学紀要, 22; 96-103, 1996.
- 6) 前掲 3).
- 7) 下村裕子, 佐藤ヨリコ, 山下香枝子ほか: 外来看護における患者と共に体験することの意味, 日本看護学教育学会誌, 4(2); 106-107, 1994.
- 8) 平元泉, 長谷部真木子, 野村誠子ほか: 小児看護学実習における外来実習の効果 - 外来実習導入前後の経験状況の比較 -, 秋田大学医短紀要, 7; 33-40, 1999.
- 9) 森田美穂子, 渋谷えり子: 看護学生の慢性疾患患者理解の